円卓無双

康頼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
円卓無双

【Ｎコード】
Ｎ０９６６ＢＡ

【作者名】
康頼

【あらすじ】
終焉の地を訪れた円卓最強の騎士ランスロット。
自らの行いの果ての結末を見て彼は何を思う。

prologue

そこは地獄のような風景だった。
ほんの数日まで、野花で溢れかえっていたキャムランの丘は血という赤い絨毯に覆われ、白銀の鎧を纏う残骸からは死臭が漂い始めていた。

何故、このようなことに……

目の前の惨劇に吐き気を催しながら、ゆっくりと丘の頂きへと歩き始める。
鉄の匂いが鼻に充満し、時々血だまりに足を取られそうになるが、それでも歩き続けた。

足が取られ、思わず足元を覗いてみる。
そこには、共に戦場を駆け、死線をくぐりぬけてきた同僚の騎士の亡き骸が無残にも転がっていた。
誇りある騎士だった彼をこのような死に追い込んだのは、私だ。

死して忠義を表した彼等に比べて、無様に生き残っている私を見て、彼等はどう思うだろうか？
いや、そもそも私にはそのようなことを彼らに尋ねる資格すら無いのだ。

そうだ……

私が、親友であり好敵手でもあった『太陽の騎士（ガウェイン）』を討ち取らなければこのような惨劇は起こらなかっただろう。
私が、誇り高き最高の王に、手傷を負わさなければ、王は死ぬこと

はなかっただろう。
私が、裏切りなどしなければ、円卓の騎士に裏切り者が現れることはなかっただろう。
私がいなければ、彼女が悲しむことはなかっただろう。

屍の道を踏み越えて、丘の頂きに辿りつく。
ここがこの戦いの終着点、王とその息子が死闘を演じた場所である。

丘の上では、国を裏切り、絶望に歪んだ表情で死んだ男の最後があった。

この男に抱く感情は複雑だ。
この男とアグラヴェインの企みにより、私の不義が暴露された。
そのことに関して怒りを感じてしまうことがあったが、今となっては憐れでしかない。
王を裏切ったことに関しても、私だけは批判をすることができない。

一人の結末を確認した足は再び丘を下り始めて、もう一つの結末を確認に向かう。
馬の背に跨り、最後にもう一度だけ丘の方に視線を向ける。

これが自らの罪だ。

背負うべき罪を目に焼き付けて、馬を走らせていく。

駆け抜ける自分の周りには誰もいない。

常に我々の先頭を走り続けた王も、隣で豪快に笑うガウェインも、その姿を見て静かに笑みを零すトリスタンも、自分とガウェインの後を追うことに必死だったガレスとガヘリスも、その光景を見て頬

を釣り上げるケイも…
全てこの世界からいなくなってしまった。

木々の隙間を縫うように走らせて向かった先は子供の頃、よく駆け回った森である。
ここが終焉の場所である。

馬から飛び降り、ゆっくりと歩き出す。

見慣れた懐かしい景色を見て思いだすのは幼少期、誇り高き騎士に憧れて腕を磨き続けた自分の姿である。
湖の精、ヴィヴィアンの元で完璧なる騎士に育てられた私は、今では全てを裏切った不義の騎士である。

懐かしい記憶に囚われつつも、歩みは何かに導かれるように進み、そして辿りついた。

樹齢数百年の大樹の幹の傍に、小さく土が盛られた傍に剣が突き刺さっていた。

それだけで、理解した。
ここが王が終焉した場所なのだと。

気付いた時には自分は両膝をつき、泪を流していた。
認めたくなかった。
私とは違い、完璧だった王が死んでしまったということに。
共に戦場を駆け抜けることができないことに。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・

どれほどの時間が経っただろうか、背後に気配を感じ、思わず振り返る。

そこには憤怒の表情を貼り付けた忠義の騎士がいた。
隻腕から繰り出される槍捌きに、思わず身体は反応し、側面に飛び転がりながらも、愛剣アロンダイトに手を掛ける。

「ベディヴィア……」

「裏切り者の貴方が何の用です」

氷河のような冷たい殺意に、背筋を凍らせる。
彼が私に殺意を向けるのは当たり前だった。
私の裏切りから祖国は分かれ、戦いが起こり、多くの騎士と、同僚の円卓の騎士を失ったのだから。
茫然と彼を見るしかなかった私を見て、ベディヴィアの表情が怒りに染まる。
「何故、剣を抜かないのです？　それとも私ごとき相手をするのに剣はいらないと？」

流石は円卓の騎士筆頭です。と吐き捨てるベディヴィアに対し、私は剣を抜くことはできない。
私はもう仲間を斬りたくないのだ。

ガレスとガヘリス、ガウェインを殺めて、王に致命傷を与えた感触を思い出すと吐き気と悲しみしか思いださない。

だが抜かなければ間違い無く私は死ぬだろう。
確かに、私と刃を交えて互角に戦えたのは、王とガウェインとトリスタンくらいだろう。
しかし、それは目の前にいるベディヴィアが弱いというわけではない。

戦場を共にかけた時に見せた彼の槍捌きは、驚嘆に値するもので、疾さでは円卓の騎士随一かもしれない。

「ならその飾りを抜いて差し上げましょう」

獣のような荒々しさから放たれた精錬された刺突の数は、六。
人の身で回避できるものではない。

横に逃げるように跳び、回避できない突きは左手で受け止める。
鋼でできた籠手を貫き、血肉を切り裂いた突きを右手で掴む。
そのまま奪い取ろうと右手に力を加えるが、距離を詰めていたベディヴィアの蹴りにより阻止された。

「甘い」

「ぐっ」

瞬時に槍を離し、ベディヴィアの蹴りを受け止めると、そのまま後方に飛ぶ。
そのまま宙に浮いた私に向かって、ベディヴィアは右手に持った槍を矢のように投げ飛ばす。

飛来する槍に対し、私ができることはアロンダイトを抜くことだけだった。
鞘から刃を抜き去ると同時に、槍を弾き返すと刃先をベディヴィアに向ける。
ベディヴィアは弾き返された槍を受け止めると、感触を確かめるように握り返す。

「流石ですね。　王が認めたことはあります」

称賛の言葉に込められた憎しみを受け止めた私は、刃先を地面に向ける。

「やめようベディヴィア」

力無く吐き出した私の一言にベディヴィアは呆気に取られたような表情を浮かべ――小さな声で笑い始める。

「王の御前だからですか？　ふん、笑わせてくれますね。裏切り者の貴方が」

その言葉に私は肯定するかのように頷き返す。
するとベディヴィアは、面白くなさそうに鼻を鳴らすと、槍を構える。

「なら、私は王に最後の手向けとして貴方の首を差し出す。　それ

が騎士の務めだ」

仇討ち。

それは主を討たれた騎士にとって当たり前のことである。

なら私ができることは一つだ。

この首を差し出そう。

剣を収めた私にベディヴィアは吠える。

「なら、そのまま死ねっ！！！！」

一直線に私の心臓に向かう刺突を、私は受け入れるように眺める。

これが私にできる最後の忠義の表し方だ、と。

そんな自分を思わず笑ってしまう。

心残りと言えば、王自らの手で討たれたかった。

そう考えた私の目の前が光に包まれた。

第一話　start

風が頬を撫でる感触に思わず目を開く。

そこには青く染まった広大な大空が広がっており、その光景に思わず顔を顰めてしまう。

カムランの丘を去った際には日は既に落ちかかっていた。

だがしかし、目の前には見間違えることのない太陽が昇っており、つまり自分は半日以上も寝ていたことになる。

いや、そもそも私は本当に生きているのだろうか？

最後に見たベディヴィアの刺突は間違い無く、私自身の胸を貫いたはずだ。

が、胸元の傷どころか受けた際の左手傷すらもない。

ベディヴィアの姿などあるわけもなく、王の墓がある森の中でもない。

ただ、目の前に広がるのは荒野や草原、遥か遠くに聳え立つ見慣れない山々ぐらいだ。

身なりも城を出た時のままで、アロンダイトも腰に差さっている。

あの世か何かだろうか？

普段はそんな迷いごとを信じない私だが、その結論が一番しっくりくる。

様々な憶測を巡らせていると後方から何か近づく気配を感じ振り向いてみる。

一言でいうと悪役が似合いそうな輩だった。

黄色でそろえた頭巾に服装。

腰には安物のような剣を携えて、こちらに向かってニヤニヤと笑みを零す三人の男達である。

あの世の使いにしては盗賊のような男達だ。

軽い失望感を味わっていると、先頭に立っていた男が腰に携えた剣を抜き、こちらに剣先を向ける。

「よう、兄ちゃん。　良いモン腰にぶら下げているじゃねぇか」

ニタニタと笑う男を見て、思わず溜め息をつきそうになる。
どうやらここはあの世ではないようだ。
むしろここがあの世なら、神に祈る者たちが半減するだろう。

となると色々聞かなければならないことがある。

「少し聞きたいことがあるのだが」

「ああっ？　何勝手にほざいてやがる。　さっさとその剣を寄こしやがれ」

何なら着てる鎧も頼むぜ、そう言ってニタニタ笑う男に、再び溜め息をつくと、腰にある名剣に手を添える。

一閃。

突き出した男の剣を柄の部分くらいから斬り飛ばすと、剣の先を男に向ける。

「少し、聞きたいことが、あるのだが？」

「ふひっ！！」

立場が逆転したことに恐れをなしたのか、それともようやく私との力量の差に気付いたのか、恐れるように尻もちをつく男に対して、後ろに控えていた男二人が慌てて武器を取ろうする。

「うひっ！！」

「ぶひっ！！」

瞬時に二人に殺意を叩きこむと、先程の男同様に腰を抜かしたように、その場に座り込む。

その不甲斐なさに呆れそうになるが、腐っても騎士。

弱いものに向ける剣はない。

ようやく話を聞けると思い、私は剣を鞘に納める。

「さあ」

「へ、へい、ここは陳留という都市から二十里ほど離れたところでさ」

媚を売るような男の表情に一瞬苛立ちを感じたが、それ以上に考えることがある。

リというのは恐らく距離のことを指しているようだが、肝心のチンリュウという都市は聞いたことがない。

「コーンウォール、キャメロット、ブルターニュ……という言葉に聞き覚えは？」

「うぇ……こー？　ろ？」

「ブル…」

「キャラメル？」

男達の反応からしてもどうやら私の知るような場所ではないようだ。
案外、あの世説は当たりなのかもしれない。
となればどうする？
やはり、都市などで情報収集するべきか？

「あの……旦那……俺らはもう行っても？」

顔を強張らせたまま笑う男に、私はもう一つ聞かなければならないことがある。

「ところでお前達、盗賊か何かだろう」

再び剣に手を掛けると、男達に向けて殺気を向ける。

「ひぃ」

「旦那っ、俺らはちゃんとはなしたじゃねぇか？」

泣きつくように訴える男たちの言葉を、私は慈悲も無く切り捨てる。

「それで、お前達の罪が消えるわけでもない。　お前達が私ではなく次の人間を襲うかもしれない」

流石にそれを捨ててておくわけにはいかない。
いつの時代も、暴力というものは弱きものを傷つけるのだから。

「恨むなら私を恨め。　それを私は自身の罪とする」

ひと思いに切り捨てるのもまた慈悲か、そう考えていたが阿呆らしくて考えるのを止める。
それは加害者の傲慢だろう。

しかし私の剣が、彼らに向かって振り下ろされることはなかった。
それは、天から降りてきた介入者により阻止される。

「まてぃぃ！！」

気配と殺意に、私は後方に飛ぶと、そこに赤き槍を携えた白き天女が舞い降りた。
艶のある肌が覗く露出の高い服装に、見たこともない青い髪の美女は、不敵な笑みを浮かべると、私に向けて赤き槍を向ける。

その美しさに思わず息を呑んでしまうが、次の瞬間、言いようのない罪悪感と不甲斐なさが私の心を締め付ける。
彼女という女性に恋をしたせいで国は滅んだのに、だ。
もしこの場に最愛（グィネヴィア）がいたら、自分で首を切り落としたい気分だ。

「我が正義の槍は無法を許さぬっ！！」

吠えると同時に踏み込んだ彼女の動きに思わず、感心してしまう。
そこから放たれる刺突の矢は、ベディヴィアほどではなかったが、それでも円卓に通じるほどだ。
即座にアロンダイトを抜き去り、刺突を弾く。

「むっ！！」

「だが、まだ青い。　それでは戦場（じょうじょう）は生き抜けない」

「ふ、小癪なっ！！」

さらに速度を上げる槍捌きに、久しぶりに騎士としての高揚感が生まれた気がした。
なら私にできることはただ一つ、騎士として力を振るおう。
刺突を読み切ると、一歩踏み込むと同時に一撃を振るう。

「なっ！！」

卓越された彼女の反応により、私の一撃は易々と受け止められる。
が、受け切れなかった衝撃により遥か後方に吹き飛ばされる。

「軽いな……もう少し食事を多く取るべきでは？」

「く……女子に言う言葉ではないな」

私の挑発に、さらに笑みを濃くした彼女はさらに速度を上げた刺突を放つ。
勿論、疾いだけでない。
しっかりと体重を乗せてはなった一撃は騎士数人ですら吹き飛ばす程の威力がある。

「が、それは判断ミスだ」

槍の通る道筋は、基本過ぎた。
先程までの変幻自在の槍捌きは失われていた。
上に巻き上げるように弾くと、無手になった彼女に距離を詰める。
「終わりだ」
剣を首筋に当てて、勝利に浸る。
間違い無く、彼女は強敵だ。
彼女に勝てる円卓の騎士は、自分を含めて数人程だろう。
「く、殺すがよい」
辱めは受けぬ。
そう目で訴えかける彼女に、思わず敬意を抱いた。
彼女は間違いなく私より優秀な騎士だ。
「疾さ、重さ共に中々なものだ。　槍捌きも驚嘆に値する。　が両立ができていない」
それができれば、今度は死力を尽くして戦わなければならないだろう。
彼女なら数年でできそうだが…
良い素質を持ったものを見て感動している私を、彼女は不審そうに視線を送る
「む、何の話だ？」
「貴方のこれからの課題だ……えっと」

「趙子龍だ」

思わず名前を聞くことを忘れていた私は、彼女から名前を教えられると、その名を記憶の中に刻みこんだ。

「それができれば貴方はまた強くなる、チョーシリュー」

「何か私の名前を呼ばれている気がしないのですが……」

私の発音が気に入らなかったのか、眉を顰めるチョーシリューに対して、苦笑いで誤魔化す。

私自身思っていたことである。

「……努力しよう。　っしまった……女性に先に名乗らせてしまったな。　私の名はランスロットだ」

彼女だけに名乗らせていたことに気付き、私も名前を名乗る。

少し前までは湖の騎士や円卓の騎士を名乗っていたが、今の私には両方相応しくない。

「らんすっ？」

「呼びやすいように略しても構わない。　昔、ランスと呼ばれたことがある」

やはり彼女には私の名前は言いにくかったようだ。

アグラヴェインやアグロヴァルなどとは違い、言いやすいと思っていたのだが……

私の提案に彼女はほっとしたような笑みを浮かべて頷く。

「なら、らんす殿で」

「なら私はミス・チョーと呼んでもいいかな？」

「みす？　どういう意味か解りませんが、私自身名前を呼ばれる気がしないのですが……」

彼女の指摘に、私がこの世界の知識が知らないことと同様に、彼女自身も私の世界の常識が通じないのだろう。

「ではチョーでよろしいか？」

「いや、そのだ……それなら子龍と呼んでいただきたい」

「ではシリュー、そう呼ばせてもらおう」

「うむ」

何処か疲れたような笑みを浮かべるシリューに不審に思いながらもとりあえず黙っておくことにした。

それ以前にやるべきことがある私は、手に持ったアロンダイトをシリューの後方に向けて投擲する。

「ひぃっ！！」

「逃げるなよ、盗賊諸君」

私とシリューが話し込んでいる間に逃げようとしていた男達の足元にアロンダイトは突き刺さった。

「ふむ、盗賊は彼らの方ですか」

「シリュー、貴方は確か私を疑っていたはずでは？」

「ぬぅ……そのようなこと貴方の剣筋を見れば解ることです」

「それに対し、貴方は少し真っすぐすぎる」

正義の槍とシリュー自身そう言っていたが、確かにそのような気がした。

彼女自身の性格も真っすぐなのだろう。

しかし今はシリューの話より先にすべきことがある。

私が一歩踏み出すと、男達は先程と同様に腰を抜かして震え始めた。流石にそこまで怯えられると、呆れを通り越して憐れに思え、慈悲の一つも与えたくなる。

後ろにいるシリューという女性の目の前で人を殺めるのもどうかと思う。

「おい、お前達、名前は？」

「か、韓忠です」

「そそそ、孫、仲です旦那」

「きききょ、？、都だな」

「……そうか、ならお前達はこれからはカン、ソン、キョウ、と名乗れ」

私がそういうと男達は呆気に取られたようにこちらを見る。
するといち早く反応できたリーダーだった男ーカンは詰め寄るように口を開く。

「だ、旦那っ！　それは名前を変えろということですかいっ！！」

「ああ、そうだ。　カンチューという輩は私がここで斬り捨てた」

それが私にできる唯一の慈悲である。
だが、それを聞いたシリューは不満げに眉を顰める。
無法者を野放しにすることは、彼女の正義にとって許されないことだろう。

「生まれ変わったお前達には、私が立派な騎士になれるように騎士道を叩きこんでやろう」

これは決定事項だ、とカン達に言ってやると、彼等は絶望を背負ったかのように項垂れたのだった。

私とシリュー、そしてカン達が出会ったこの時、私の最後の物語が始まったのだった。

第二話　lead　a　new　liife

漢の都である洛陽の東方に位置する都市、陳留。
活気に満ちた大通りの脇にある小さな酒場。
そこに私達はいた。

「色々の都市を回ってみたが、やはりここが一番賑やかで活気がある」

「そうなのか？　しかし、ラクヨウ…と言ったか？そこが一番賑やかではないのか？」

シリューが満面の笑みで酒を呑み干す姿を横目で見ながら私も酒を口に運ぶ。
故郷の洋酒と違う味わいがあり、なかなか癖になる。
しかし、酒とは違いシリューの大好物らしいメンマという食物はあまり美味しく感じなかった。
しかし、そのことを口に出すことはない。

言えば先程、店の外に蹴り飛ばされたキョウの二の舞になるだろう。
彼の体格からしてメンマというものは食べ応えがないはずだ。

「そう言えば、旦那はこれからどうするんで？」

心配そうに口を開くカンに、賛同するようにソンも必死に頷く。
彼等は私と行動を共にしなければならないのだから。

「そうだな、とりあえず情報収集と言ったところか。　私はこの国の地理、文化に無知すぎる」

簡易な説明はシリューから聞かせてもらったが解らないことが多すぎる。
唯一解ったことが、今私がいる現在位置とこの国のこと、そして我が故郷から遠く離れた場所であることだ。
帰る方法が思い浮かばない以上、まずは、当分の拠点であるこの近辺の情報を調べておく必要があるだろう。
遠い話になるが、地道にでも情報を集めないと、死ぬまでこの異郷で暮らすことになる。

そして情報収集の合間に、この国の言葉を勉強しておくべきだろう。言葉は何故か通じているものの、文字の読み書きが当然ながら全くたりともできていないからだ。
これでは情報収集の効率が落ちるうえ、生活することもままならない。

「ふむ、確か、らんす殿はふらんすという天の国の出身でしたね」

「天の国……それについては何も言えないが、『天の御遣い』と呼ばれる神聖なものではないことは確かだろう」

『天の御遣い』という存在がこの世界に現れるとこの国の魔導師が言っていたようだが、間違いなく私自身ではないことは理解できている。
私のような者がそのような大それたことを出来る筈がない。
シリューは私の鎧と剣を見て興奮しながらそう言っていたが、それならばこの鎧と剣を私に授けた王が『天の御遣い』なのだろう。

迷いを振り切るように器に入っている酒を呑み干すと、シリューが空になった器に注ぐのを見て、思わず尋ねてしまう。

「ところでシリューは何故私について来る？　道案内を買って出てくれたのは有り難く思っているのだが？」

彼女は私と違い、しっかりとした目的がある。
自らの槍を捧げるに値する君主を探すという目的が、だ。
私も王に捧げた身であったため、そのことが騎士にとって大切なことだと理解している。

「ふふふ、らんす殿に興味がでましてな……当分貴殿の傍で居させてもらおう」

「ふ、それは光栄なことだ」

にやにやと笑みを浮かべるシリューの言葉は聞いて、こちらも思わず顔を緩めてしまう。
彼女ほどの器量のある良い女にそう言われて嬉しくならない男などいないだろう。

「ということは当面はこの近辺の情報収集するということですかい？」

「ああ、それと資金調達だな。　金がないとどうにもならない」

この国の金を異邦人である私が持っているわけもなく、この場もシリューに奢っていただく形になっている。
鎧と剣以外の、装飾品……宝石などは先程売り飛ばして金にしたが、その金もすぐに尽きるだろう。
つまり、早急に金になることをしなければならない。

「なら、此度の微兵に参加しては如何かな？　らんす殿ほどの腕があれば大金を手に入れることも簡単だろう」

「確か『黄巾賊』という輩を討つために民から微兵するのだったな？」

シリューの提案は確かに的を得ている気がする。
私としても賊を野放しにするということは許し難きことであるうえ、戦功を上げれば纏まった金も手に入るだろう。
何より、良い鍛錬になりそうだ。

「え、旦那……何ですかいその視線は？」

「参加するのは旦那なんですよね」

私の視線に、いち早く反応したカン、ソンは顔を青くさせながら口元をカタカタと震わせる。
そんな彼らの姿を見て、危険察知能力は成長しているようだと感心してしまう。

「私は言ったはずだが？　私はお前達を立派な騎士にすると」

実戦ほど経験を積めるものはない。
故に彼らの参加は決定事項である。

が、それでも戦場の恐怖からか、二人は私に必死に懇願し始める。

「ちょ、俺達に戦は無理ですぜ！！」

「え、ええそうですよっ！！　情報収集は俺達に任せてくださいよ

！！　そりゃ、ばっちり完璧に調べてきますから」

「却下だ。　情報収集にも金が必要だ。　何より一人より四人で参加する方が効率がいい」

微兵に参加できれば、他の人間とも繋がりができる。
そこから情報を得ることもできるのだ。

私の決定にカン達は肩を落として自分の不運を呪っているのに対し、隣のシリューは面白くなさそうにこちらに視線を流す。

「何か問題があるのかな？」

「四人ということは、私が入っていないのですが？」

シリューの指摘通り、シリューは頭数には入れてはいない。
カン達と違い、彼女の意志を縛ることは私にはできないからだ。

「貴方は好きにしていていいのだが？」

「なら、私も参加しましょう。　刃は交えはしましたが、並べてはいませんから」

四人より五人の方が効率がいいでしょう、と不敵な笑みを浮かべるシリューに呆れながらも否定することができなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・

陳留を出て、数日。
我々陳留軍五千は、黄巾賊が住み着くといわれる山の眼先にまで迫っていた。

「うえっ」

緊張のあまり胃液を吐き出すソンに、私は行軍中に集めた薬草を手渡す。

「呑まれるなよ。　戦場で一番恐れるものは目先の敵よりも恐れ委縮することだ」

特に戦い慣れてない者にとって最初の試練である。
戦場で委縮して、何でもないことで死んでしまう兵は少なくはないのだ。
それはソンだけでなく、カンやキョウ、周囲にいる民兵にも言えることだ。

「ふむ、確かにその通りですな。　流石らんす殿、良い言葉です」
軽口を言えるシリューは流石というもので、少しの緊張があるものの至って普段通りである。
ジョウザンのノボリリュウは迷いごとではないようだ。

「しかし、この軍の主は中々なものだな」

「ほう、やはりわかりますか」

楽しげに笑うシリューの言うとおり、この軍は優秀である。
民兵の足に合わせて正規軍が疲労を溜めない程度に調整し、周囲を囲む陣は鉄壁といってもおかしくない。
伝令も細かく飛ばし、探査を伸ばす慎重さも評価できる。
何より正規軍の覇気が、士気が高い。

「ああ、確かソウソウというものらしいな？　ここの主は」

この軍を率いる者の名は、チンリュウに入るより前に耳にしていた。
かなり優秀な女性だということもだ。

「はい、私が見た所一番の有力候補でしょうな、知、武、政に優れ、人を引っ張っていく魅力もあり、戦陣を切り裂く勇もある。　まさに傑物というやつでしょう」

「なるほど、そのような者なら一度話してみたいものだな」

シリューの言葉に間違いがなければ、私はそのような人間を一人しか見たことない。

しかし、私の希望は面白そうに笑うシリューにより砕かれる。

「ふふ、それは難しいかもしれませんな。　曹操殿はどうやら女子がお好きなようですから」

「……なるほど、それは残念だ」

「私も、それさえなければ我が槍を捧ぐことに迷いは無かったのですが……」

何か思い出したかのように疲れたような表情を浮かべるシリューに、私はこれ以上深く聞くことは止めた。

馬鹿話をしていると先頭のほうから伝令の旗を持った騎馬兵が現れる。

前方に黄巾賊、現ると。

第三話　win one's first game

贓物と鮮血が宙を舞い、人のうめき声と狂ったような奇声が響く。
まさに戦場とは人の世の地獄である。

慣れることのできない空間の中、私は借り物の剣と槍を振るい、賊を殺す。
幾多の戦場を共に切り抜けた相棒（アロンダイト）を使用しないのは、シリューが目立つと言っていたからだ。
確かに湖の精が鍛えた聖剣なのだから、その辺にある名刀とは比べ物にはならないほどだ。

それ故に、その輝きに目を奪われる輩もいるだろう。
そのような者達に絡まれるのは、面倒この上ないことだ。
それは剣だけではなく、身に纏う鎧も同じことで、それを隠すためにぼろ衣のマントを羽織って隠している。

「しかし、らんす殿は槍も使えるのですね……今度、我が槍と交えてみませんか？」

「魅力的な御誘いだが、断らせてもらおう。　私の恥技では、貴方の神槍には遠く及ばない」

使えると言っても、シリューやベディヴィアのような卓越したものではないのだ。
比べることすら侮辱と言える。

「はっはっはっはっ、振られてしまったか。　では再びりべんじをしても良いかな？」

「それは、楽しみにしよう」

世間話をするような会話の隙を狙ってなのか、賊共はシリューと私に一斉に襲いかかる。
それと同時に隣のシリューが一歩踏み出すと、そこから近づくことさえ許されない超速の刺突を放ち、速賊共を屠る。

「む……会話の途中に割って入るとは礼儀がなっていないようだな……いいだろう、来いっ賊共っ！！　趙子龍の槍捌き、思う存分に見せてやろうっ！！」

命を刈り取る彼女は何処か美しく北欧神話に登場する戦乙女のようだが、彼女と対する賊にとっては死神そのものだろう。
舞い踊る戦姫の活躍を見ながらも、意識は常に後ろで戦うカン達に向ける。

兵数はこちらの方が優っている上、正規軍の活躍により士気でも優っている。
が、それでも犠牲は出るものだ。

彼らを騎士と育てると言った以上、つまらないことで死なせるわけにはいかない。

「らんす殿、彼等も中々骨があるじゃないですか？」

カン達の様子を見ていたのは私だけでないようで、シリューも面白そうに彼らをの方に視線を送る。
人から見れば、シリューなどの武に比べると、彼らの武は無様で醜いものかもしれない。

が、それでも必死に戦い、生きようとしていた。

「しかし、いきなり戦場に送るとは、らんす殿は指導は厳しいものですな」

「先に言っておくが、私は普段は新兵を戦場に送らない」

新兵を送るということは犠牲が多くなるということになる。
故に鍛錬を繰り返した後、戦場に送るというのが常識なのだが、カン達はそれに当てはまらない。

「カン達は、彼らとは大きく違うことがある」

「ふむ……法を犯した無法者ということですかな？」

目の前に迫る賊を蹴散らしながらも、シリューとの会話を続ける。

「そういうことだ。　つまり目の前の賊達と何の変わりもないということだ」

それが此度の黄巾賊討伐戦に参加した理由へと繋がる。
今までの自分達の姿を認識させ、彼らが起こしてきた罪を、与えられるはずだった罰を見せることだった。

「もし彼らが真っ当な人間になっても、起こした罪が消えるわけでもない。　仮に千を救った英雄になったもしても、犠牲になった者からするとただの仇だ」

事実、私や王も全ての者を救えたわけではない。
戦略の都合上、見捨てた集落は数多にある。

彼らから見れば、私達は英雄（さつりくしゃ）という殺戮（えいゆう）者なのだろう。

「しかし、それでも私は槍を握りますな」

「強きものと戦うためか？」

「いえ、強きものと戦いたいというのは武人の性というものですが、私が立ち上がったのは民のためです」

静かに語り始めたシリューは吠えるように槍をうねり上げて振るう。

「汚職、賄賂、強奪、様々な悪意が罪のない民を食い物とし、それが当たり前のような世。　泪を流すのはいつも弱き民だ」

賊を切り裂き、血しぶきを浴びながらも、ただひたすら目の前の敵を突き、駆逐する。

止めることのできない激情、それがシリューの槍には表れていた。

「だが、武ではこの国の人々を助けることができない。　だからこそ、私はこの国を導くことができる主を探している」

彼女の思いと掲げる義を知り、私は王に仕え始めた頃の若かった自身のことを思い出す。

焚火を戦友達と囲み、夜遅くまで語り合ったものだ。

そのためなのか、私はシリューに理想を貫いてほしいと思ってしまった。

「シリュー、貴方ならきっといつか忠義を捧ぐことができる主君にめぐり合うことができるだろう」

私の言葉にシリューは、何処か嬉しそうにも見えた笑みで頷いた。

「そうですね……」

シリューに意味のあるような視線を向けられた気がしたが、戦場の空気が変わったことため、そのことを意識外へと追いやった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・

賊軍を敗走へと追い込んだのだが、追撃を掛けることはなかった。

その判断は正しいものだろう。

五千から成り立つこの軍の編成は、戦い慣れた正規軍三千と初陣を飾ったばかりの新兵達である。

初めての戦場に、新兵達の疲労が溜まったことは間違いない。

何よりも、先程打ちのめした賊軍は本体ではない。
情報だと一万を超える軍勢らしく、先程の軍は三千程しかないだろう。
このまま追い討ちを掛けて、主力とぶつかれば、こちらは大きな犠牲を払うことに成りかねない。

「日も暮れてきたようですから、今日の所は、此処に陣を敷くことになるでしょう」

本営から配給を頬張るシリューは至って普段と変わらず、流石は歴戦の勇士を自称することはある。
それに対して、だ。

「うえ……し、死ぬ……」

「うう、今日のことを思い出すと吐き気が……」

「お、お腹が空いたんだな……こんなんじゃ足りないんだな」

カン達は、一歩も動くことのできないといった疲れ切った様子で、地面に倒れていた。（一名は違う意味で）

「ふう、カン、そんなことが言えるのを幸せと思え。　ソン、吐いてでも食え、明日は持たなくなるぞ。　キョウ……お前は少し身体を絞ったほうがいいな」

倒れた見習い達に忠告と助言を言っていると、一人だけ優雅に食事をしていたシリューがニタニタと笑い始める。

「ほう……やはり、らんす殿は面倒見がいい。　人が良いと言われ

たことがあるのでは？」

「……さあな、女性に対しては細心の注意を払っていたから彼女らには好評だったが？」

「なるほど、女ったらしというわけですな」

「そのおかげで、よく決闘を申し込まれたものだ」

面白おかしくシリューと話をしていると、再び伝令の旗を持った騎馬が陣内を走っていた。

伝令内容は、この陣の東に数里離れた場所に賊軍が潜んでいることが、探査隊により報告があったようだ。

そう多くない数らしく、正規軍五百騎のみで奇襲を掛けるということで、新兵は陣内の警備を行え、という命であった。

「ふむ……馬鹿の一つ覚えのように奇襲とはな……」

「それを奇襲されるのだから世話がなくてすむ」

こういうのをウゴウのシューというらしい。

これが頭のない賊の限界なのだろう。

それとも、賊の奇襲を看破したソウソウという者が凄いのか……。

「少し、見てみたい気もするな」

「？　何をです？」

「この戦場を描いた才気に、だ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「一応言っておきますが、我々への命は陣内待機ですが？」

「わかっている。　悟られるような真似はしない」

シリューとともに陣を抜け出して、主自ら乗り出した奇襲部隊の後をバレない距離を保ちつつ追う。

もちろん今回の夜遊びにカン達は置いてきた。

彼らの疲労具合からして連れていくのは、流石にむごい仕打ちである。

「わかっていると思いますが、露見すれば処罰が下ることを理解していますか？」

「ふ、ならシリューは戻ったらどうだ？　引き返すなら今だぞ？」
ソウソウに興味を持ったのは私だけだったため、シリューには理由がない。
が、シリューは先程まで真面目なことを言っていた顔を一変し、悪だくみを企むような黒い笑みを浮かべる。
「ふふふ、先に言っておきますが、私はこういう行動は大好物ですよ」
「だろうな」
出会ってまだ数日だが、彼女の性格がわかってきた気がする。
中々、面白いところがある魅力的な女性だと再認識したころで、気配を消しつつ奇襲部隊を追う。
「む……あの戦闘の騎馬の女性、できるようだな」
先頭を進む長い黒髪の女性の雰囲気から、かなりの腕を誇るように見えた。
手合わせを行ったわけはないが、この感じはシリューと出会った時の感覚に似ている。
私の発言に、シリューはからかうように口を開き説明を始める。
「お、流石は女好きのらんす殿、お目が高いな……彼女は、曹操殿の右腕と呼ばれる猛将、夏侯惇殿だ」
「なるほど、英雄の元には有能が揃うというわけか」

「揃えたというのが正しいかもしれませんな……陣を指揮している夏侯惇殿の妹に当たる夏侯淵殿のように才覚のある者は口説き落としているようだな」

目利きもあるということは、名君の条件の一つだろう。
武に優れ、知と政に精通し、人望もあり、才を見抜く力もある。
それを聞くと本当に会うのが楽しみだ。

「となると、シリューも口説かれるのではないか？」

「ふう、前にも言いましたが、私は女性に興味はありませんよ」

軽口を言い合いながら歩いていくと、遂に私はお目当ての女性に見ることができた。

はっきり言えば、ソウソウという人間を過小評価しすぎていたかもしれない。
確かに、想像以上に小柄な女性だったが、彼女を纏う覇気は凄まじいもので、それ程の覇気を持つものは私が見てきた中で数人程度だ。
自信、才覚、その他諸々を内包した英雄の姿を見て、私の足は陣へと引き返した。

「む、最後まで見ていかなくて良いのですか？」

「ああ、結果は出ている。　賊兵が死体の山を築き、完璧な結果を出すだけだ」

結末を知っている物語ほどつまらないものはない。
私ができることは、明日彼女が描く劇中に参加するために身体を休

めるだけだった。

第四話　win one's first game ?

翌日。

昨夜、見事に賊軍の奇襲部隊を殲滅した正規軍とともに、我ら新兵部隊は黄巾賊が立てこもる山へと向かう。

昨日の奇襲が失敗したせいか、賊達はようやく警戒をし始めたようだ。

戦力を分散することなく、全戦力を山砦に立て籠もっているらしい。

「ふむ……死肉を漁る犬畜生から臆病な亀になりましたか……」

賊軍の様子を聞いて、シリューはいつも通りニヤついているが、中々面倒なことになった。

戦術の基本としては城攻めを行う場合、攻める側は相手の三倍の兵力を持たなければ落とせないと言われている。

正確にいうと、賊が籠っているのは山を切り抜いた砦らしいものだが、それでも二倍以上の戦力は必要だろうと予測される。

そのうえ、二度打ち破ったとはいえ、兵数はまだ向こうが優っているはずだ。

いくらソウソウが率いる精強なチンリュウ軍と言えど、此度の城攻めは容易ではないだろう。

「策でも用いらなければ、落とせないかもしれないな」

「確かに曹操殿が鍛えた正規軍が六千程であれば、力ずくでも落とすことができるでしょうが……」

「今回は正規軍三千と新兵二千だ……やれば新兵は全滅だな」
危地とも言えるこの局面こそ、ソウソウという将の器の見せどころかもしれない。
そして、ソウソウは動いた。
「む……これは……」
「ふむ……軍を割ったな。　しかも向こうを率いるのはあのカコウトンいう猛将だ」
昨日、遠くから見た猛将が正規軍の半数である千五百を率いて、ソウソウ率いる主軍から離れていく。
「シリュー、彼女くらい有望な将は、ここにいるのか？」
「いや、昨日も話しましたが、彼女に匹敵する将は妹の夏侯淵殿くらいかと思います。　その夏侯淵殿も夏侯惇殿に同行しているようです」
シリューの見解が正しければ、ソウソウを守る盾はないようだ。
これが策の一つか？
そう判断するしかなかったが、ソウソウや私達がいる主軍は、逸れることもなく賊軍の塒へと向かっている。
このまま進むと程なくして、賊軍のいる砦に辿りつくだろう。
「ふむ……まさか、らんす殿これは……」

「ああ、ソウソウ殿は大胆な方のようだ」

何故か嫌な予感もしたが……

……

……………

私の勘も捨てたもののではないようだ。

「くあああああっ！！　俺達はここで死ぬんだっ！！」

「ちくしょっ！！　死ぬ前に、良い女と一発したかったぜっ！！」

「死ぬ前に腹いっぱい、飯を食いたかったんだな……」

小便を漏らし、返り血を浴びながら狂ったように泣き叫ぶカン達の横で、私とシリューは共に槍を振るう。

「それだけ喚くなら、死にはしないな」

「はっはっはっ、これは中々の死地ですな」
目の前には賊共が溢れかえり、狂人のように襲いかかってくる。
それを確実に仕留めながら、この場に留まる。
「しかし、曹操殿の策がここまで嵌るとは、やはり賊軍は能無しでしょうか？」
「さあな、だが、この数は些か面倒だ」
ソウソウが用いた策とは自らを囮にするという危険度の高い策だった。
そのうえ盾と矛の不在なのだから、より危険度が増すのだが、見事ソウソウはそれをやり遂げた。
が、しかし、世の中とは上手くいかないものである。
軍としての策はなったが、私達五人にとっては最悪の結果を迎えた。
それは、挑発を行い、軍を後退させたときに起こったことである。
昨日からの疲労と、襲い来る賊の群れの恐怖からか、カン達が腰を抜かしてしまったのだ。
放っておくわけにも行かず、引きずりながらも後退していたのだが、あえなく賊軍に呑みこまれた。
当初は正規軍が援護してくれていたのだが、数の暴力により正規軍は私達を見捨てるしかなかった。
残酷なようだが、それは軍として当たり前のことだ。
私達五人を助けるために、正規軍千五百を死地に飛びこませるのは無謀である。

「しかし、これでやはりらんす殿はお人好しだということがわかりましたなっ！！」

槍を振るい、間合いに入った数人の賊共を一瞬のうちに突き殺しながら、シリューは吠えるように話しかけてくる。

「それも言うなら貴方もだろう？　彼等は一応無法者なのだから見捨てておけばいいのではないか？」

シリューなら賊の包囲を突破し、正規軍の元へ戻るのも容易だろう。何より彼女には大望がある。

このようなつまらない死に方をすべきではないだろう。

が、それでも彼女はこの場から動くことなく、笑みを浮かべる。

「ふ、同じ窯を囲んだ仲間を見捨てる非情ではありませんよ」

迷うことなく、そう言った彼女はまさに英雄そのものだろう。

つまらぬ死に方をさせられないな……

彼女はこの時代の宝である。

故に死なせるわけにはいかなかった。

手に持った槍を迫りくる賊共に投擲すると、腰に刺さったアロンダイトを引き抜く。

五人纏めて串刺しにした私の姿に一瞬動きを止めた賊共の首を落としていく。

「聞け賊共よっ！！　我が名はランスロット、貴様らを冥府に送る、天下無双の騎士なりっ！！」

アロンダイトを天に掲げ、威風とともに名乗りを上げる。

もう一度だけ、騎士へと戻るために。

…………………………………………………………

華琳ｓｉｄｅ

迫る賊軍をかわしつつ、尚且つ引きつけておくために、後方へと下がる軍の中で、私は奇妙なものを見つけた。

正確には、その情報は軍の被害を確認するために飛ばしていた間者の者の報告から聞いている。

逃げ遅れたものが数名いると。

今回、策を考え付いた荀？――桂花の案を取り入れた際に、多少の犠牲が出ることは覚悟していた。

だが、私――曹孟徳は大望を秘めたまま止まるわけにはいかなかった。

だからこそ、被害を最小限とし、失う命を心に刻みながら伏兵を率いる春蘭達を待つことにした。

彼等もその犠牲となるとばかり思っていた。

だが、彼等は眩い光を放ちながら、賊兵を切り裂いていく。

その姿は遠目からでもはっきりとわかるほどの威風堂々とした姿だった。

局地的な奮闘が、戦場全体に影響を及ぼしている。

「まさか……こんな拾いものをするなんて思わなかったわ……」

間違い無く、自分は今笑っているだろう。

周りに控える者達も不審そうに私を見ているだろう。

それでも私はこの歓喜を抑えることができなかった。

春蘭達が騎馬部隊を率いて現れる。

ようやくこの戦場は終わりを告げることができるようだ。

星side……
side out……

堂々とした名乗りを上げたらんす殿に群がるように賊兵が襲いかかる。
が、それはらんす殿が振るう一撃により吹き飛ばされ、無数の屍を築く。
それに怯んだ賊は、一瞬のうちに首を飛ばされ、地面にひれ伏す。
一太刀も当てることもできずにいる、賊共はようやく目の前にいる男が化け物だと気付いたようだ。
恐れなして逃げようと者もいるが、振るわれた一撃に巻き込まれるようにして死に至る。

それをらんす殿の後ろで私は茫然と見ていた。
数日前に出会い、槍を交えた際に彼の実力は痛いほど理解できた。
現状の自分では遠く及ばない遥か遠くにいるということを。
だが、目の前にいるらんす殿は私の予想を容易に覆す。
鮮血を浴びても顔色一つ変えず賊を屠り、溢れんばかりに撒き散らす殺意と覇気で遥か遠くの賊達を圧倒する。
天下無双。
そう彼は言った。
噂によると呂布と呼ばれる猛将も同じように呼ばれているようだ。

「全く……らんす殿の傍にいると、退屈しませんな」

この国はだけではない、世界は広いだと実感できた。
だが、この趙子龍、その程度のことで武の道の歩みを止めるわけにはいかない。
まずはこの戦場でそれを証明しよう。

怯みながらも迫りくる賊共に私は跳びかかった。

side out

第四話　ｗｉｎ　ｏｎｅ'ｓ　ｆｉｒｓｔ　ｇａｍｅ　？（後書き）

初めて主人公以外の主観で書かせていただきました。

皆さんが納得できる出来であれば幸いかと思います。

第五話　perplexity

戦場から無事生き残ることができた私達は、陳留にある数ある一つの借り宿の一室を拠点とし、情報収集と鍛錬に明け暮れながらも、平穏な日々を送っていた。

「うぎぎぎぎぎ……、だ、旦那……もう無理だって」

「ぐあああ……う、腕が……」

「ああ、何か疲れ過ぎて、眠たくなってきたんだな……あれ？　川の向こうに死んだばあちゃんが見えるんだな……」

「お、おいっ！！　デク、ぜってぇその川を渡るんじゃねぇぞっ！！！　良く解らねぇが嫌な予感がプンプンすんぞっ！！」

シリューに訳してもらったこの国の書物を見ながら茶を呑んでいると、庭先で鍛錬を言いつけておいたカン達の叫び声が聞こえ始めてきたので、そちらの方に視線を送る。

カン達には重さ三十斤ほどの岩を抱かせて、その場に立たせている。既に一刻以上経過しているためか、三人の顔色は青いを通り越して白くなっている。

「それだけ叫ぶ元気があるなら、あと一刻は大丈夫だな」

「旦那は、ぜってぇ鬼だっ！！！！」

泣き叫びながらも、岩を投げ捨てなくなったカン達を見て随分逞し

くなったものだ、と感心してしまう。
これならば、戦場で腰を抜かすという失態を犯さないだろう。

「あ、あの皆さん、そろそろ昼食の時間ですよっ！！」

そろそろ次の段階に移りたいところだ、と思考を巡らせているとむさ苦しい部屋の中に可憐な声が響き渡る。
振り返ると、そこにはこの宿の料理を任されているテンという名の少女がいた。

「ああ、すまない。　すぐに向かう」

「うおっ！！　俺達の女神が現れたぜっ！！」

「ようやく……鬼から解放される……」

「め、飯だっ！！　オデが一番だっ！！！」

岩を放り投げて、いつにも増して俊敏な動きで食堂へ向かうカン達を見送ることになった私とテンは思わず顔を見渡せて苦笑いを返す。

「流石は女神、死人を蘇らすとは……恐れ入った」

「あはははは……あれはただ鬼さんから逃げたかっただけじゃないですか？」

まさしくテンの言うとおりだろう。
昼食後の休憩は無しにして走りこみでもやらしておくか？
そんなことをと考えつつ、テンとともに食堂へと向かう。

しかし、このテンという少女の方から武の匂いがするのは気のせいだろうか？

……………………………………………………………………………………………

「いや、昼間から酒とメンマとは何と贅沢だろうか」

「ほどほどにするべきだと思うが？」

いつの間にか食堂に現れて、いつものようにメンマと酒を楽しむシリューを横目に見ながら食事を含んでいく。

しかし、この国の食事は上手いものだと思う。

故郷では、このような色取り取りな食事は出たことがないうえ、全てのものが固かった。

ここの味を知った私は、いつか故郷に戻った際にあの雑な料理に耐えられるだろうか？

「ふむ……ではらんす殿も一献どうかな？　いける口であろう」

「真昼間から呑むものでもあるまい」

いつものように勧めてくるシリューには悪いと思っているが、私は禁酒をしているのだ。
過去に戦勝祝いに毎夜宴を開いていると、敵軍から急襲され、酔っぱらって大敗したことがある。
それ以降、私は酒を呑まないことにしている。

私がいつも通り断ると、シリューは特に気にした様子もなく、がぶがぶと酒を呑み干していく。
その姿を見ていると、シリューの何処に酒が消えていくのか気にはなったりもしたが、目の前の食事を楽しむことにした。

「ところで、今日面白いものを見つけましてな……どうでしょう、昼は私と少し街へ出てみませんか？」

互いに食事を終えて、食後の茶を呑んでいると、シリューが満面の笑みを浮かべながら誘ってくる。
その笑みに何か裏があるように感じたが、日頃シリューには世話になっているために断りにくい。
特に用がなかったこともあり、了承しようとすると、向かい側にいたカン達が突然立ち上がる。

「その誘い、男なら受けるべきですぜ、旦那っ！！」

「そうですっ！　子龍の姉御にはいつもお世話になっているじゃありませんかっ！！」

「うんうんっ！！　キシは女性にシンシ的でないといけないんだなぁっ！！」

私に詰め寄るようにして、熱心に勧めてくるカン達だが、その必死さが余計に哀れさを際立させる。

こいつらはそんなに鍛錬が嫌なのか？

先程、逞しくなったと思っていたが訂正である。

こいつらまだまだひよっこだ、と。

「ああ、そうだな。　シリューの誘いを受けさせて頂こう」

「しゃあっ！！　数日ぶりに安眠できるぜっ！！」

「最近、夢に出てくるんだよな……地獄の鍛錬が」

「オデなんか……旦那に火であぶられて食べられる夢を見るんだな……」

私の了承とともに天に昇らんばかりに喜びを露わにするカン達に対して、私は一枚の紙を投げ渡す。

「なら心優しい鬼（わたし）からお前達にこれをやろう」

手渡された紙を受け取ったカン達は、満面の笑みのままその場で固まる。

私が昨日纏めたカン達の鍛錬計画書である。

「サボってみろ……今夜は簀巻きにいて宿の外へと放り出してやる」

軽い脅しを掛け終えると、私はシリューとともに食堂を後にする。

「神は死んだっ！！！」

「いっそ殺してくれっ！！」

「ああ、ばあちゃん……オデ今逢いに逝くよ……」

カン達の断末魔が聞こえた気がしたが、こちらも加減しているのだから死ぬこともないだろう。

借りに、もしサボったとしても、素直にテンに聞けばすぐにわかるのだから、問題ない。

「……私はあの時、彼らを討たなかったことに罪悪感を覚えます」

「気のせいだろう」

宿を出て、市へと辿りついた私達は気ままに店内を覗いていく。
人々の活気に満ち溢れた陳留(ここ)にいると、現在のこの国の状況を忘れそうになってしまう。
この国は黄巾賊という害だけではなく、この国を統べる漢王朝が腐っているらしい。
都である洛陽では醜い権力争いにより罪なき者達の命が失っている。
辺境の村では餓えて死ぬ人々が後を絶たない。

その現状に怒りを感じるが、どうすることもできない遣る瀬無さが心を支配する。
私もシリューと同様にこの世を鎮める主を探し仕官するか、私が先導し出来る限りのことをすべきか、と様々な方法を考えているが、気乗りしないのだ。
もう誰にも仕えることは、できそうもない。
私ごときが立ち上がれば、より世を乱しかねない。

「ふむ……考え事かな？」

「ああ、すまないな……せっかくの誘いなのに失礼なことをした」

思い耽りすぎたのか、気がついた時には目の前にはシリューの呆れた顔で立っていた。

「ふむ……珍しい……というわけでもないな。　ここ最近らんす殿はいつも何かに迷っておられる」

あのこの前の戦からですな、そう言っていつも通りの笑みを浮かべるシリューだが、その眼は真剣そのものだった。

……どうやら私もまだまだのようである。

「ふぅ、どうやら私の負けのようだ」

「ふふふ……らんす殿からの勝ち星は貴重でありますからな。　忘れぬようにこの日を胸に刻んでおきましょう」

向こうで話しましょう。

シリューの提案に私も頷くと、向かい側にあった酒家へと足を運ぶ。

時間が時間だからか、店内にいる人は奥の席に座っている女性くらいで、私とシリューは部屋の隅の席に腰を下ろす。

酒とメンマを頼むと、シリューは話を切り出してくる。

「さて、らんす殿の悩み事とはなんですかな？　この趙子龍が微力ながら力を貸そう」

「今、この国に苦しむ者達についてだ」

シリューの好意に私は悩みを迷わずに吐き出した。

すると、シリューは眉を顰めながら口を開く。

「普通、もう少し濁したり、遠回しに尋ねてきませんかな？」

「私の考えなど、聡明なシリューにはお分かりだろう。　無駄な時間を省いたまでだ」

シリューのいつもの物言いを真似したように答えると、彼女は面白くなさそうに口をすぼめる。

「む、その無駄な時間こそが私の楽しみなのですが……」

「その意見には賛成だが、この話でするべきことではないだろう」

私の言い分に一応納得したのか、すごすごと下がったシリューは真剣な顔つきで答える。

「しかし、私にはその答えを出すことはできません。　その思いは私も同じですが、どうすれば世が良くなるとか、豊かになるだとかはわかりませんから」

無責任にも聞こえる答えだが、とてもシリューらしく、武人らしい答えだった。

私もその心情に頷くとシリューは話を続ける。

「貴方が立つというのなら、我が槍は貴方に捧げましょう」

「馬鹿を言うなよ……私が立ったところで何もできないうえ、誰もついてこないだろう」

私の起こしたことと言えば、不義を起こし、国を割ったことぐらいだ。

そんな大馬鹿に何ができるというのだろう。

「……確かにらんす殿が何ができるかはわかりませんが、貴方の後を誰もついていかないわけがない。　少なくとも貴方の背を私と韓仲達はついていきます。　必ず……」

真剣な眼差しでそう訴えてくるシリューに、思わず吹き出してしまいそうになる。

本当に彼女は良い女だと。

「ふむ……何やら熱い話の中を入るのは気が引けるが、そろそろ私も話に加わってもいいだろうか？」

突然、頭上から降ってきた言葉に私は顔を上げると一人の女性が立っていた。

青い髪に、この国の青いドレスを身に纏い、綺麗な足を見せた美麗な女性に視線を送っていると、横から耳を引っ張られた。

「なにやら腹が立ちました」

「とりあえず謝っておこう」

視線を女性の足元から顔へ戻すと、シリューが手を離して元の席に戻る。

「すまないな、夏侯淵殿、つい話に夢中になってしまった」

「気にすることはない、趙雲殿。　こちらも貴重な話が聞けた」

何やら親しげに話し始めたシリューと女性に置いてきぼりされてしまったようだ。

そのうえ、カコウエンと言う名は聞いたことがある。

なるほど、シリューは本当にやってくれる。
煮ても食えない奴とはこういうやつを指すのだろう。

「さて、らんす……殿だったな？　私は夏侯淵と言う。　この陳留の太守を務める曹操様の将の一人だ」

「初めまして、最近この陳留に住まわせてもらっているランスロットだ。　言いにくかったランスでいい」

この都市の高い地位に立つであろうカコウエンに対して失礼とも言える紹介だが、当の本人は気にすることなく笑みを浮かべて答える。

「わかった。　ではらんす殿、貴方に少しついてきてほしいところがあるのだが」

予測していた言葉に私は、思わず溜め息をついて頷いた。
出かける前の嫌な予感とはこれのことだったのか、と今更ながら思い、シリューの評価は再評価すべきだろうと考えていた。

第六話　chance meeting

酒家で出会った女性、カコウエンに連れられて私とシリューは、この陳留を統べる王であるソウソウの元へと向かっている。
何れ、会うつもりだったがこうも早く会う機会に恵まれたのは幸運と言うべきか？

「ところでらんす殿は、異国出身なのか？　その身なりからと聞き慣れない名前から察するとこの国の人間とは思えないのだが」

無防備に背を向けて先導しながらこちらに質問をしてくるカコウエンだが、その歩く動作一つでも窺える洗練さが、彼女の武の深さを語っているようだった。
シリューといい、このカコウエンといい、この国の女性の勇猛さには驚かされる。
そんな評価を立てながら、私は触りのない程度に答える。

「ああ、数日前にこの国に来たところだ」

「そうか、私はこの国から出たことがないので、少々異国の話には興味があるな」

「なら今度時間が空いたら話そう。　つまらぬことかしれんがな」

「その時はこの私も呼んでください。　らんす殿の話にはいつも驚かされる」

私に抱きつくようにくっ付いてきたシリューが、カコウエンの背に視線を向ける。

その視線を感じ取ったカコウエンは呆れたように呟く。

「ふ、仲が良いことはいいことだな」

「ふふふ、羨ましいですか？　所で夏侯淵殿はお相手の方とかいらっしゃいますかな？」

「私は、曹操さまにこの身を捧げてものでな」

挑発にも乗らずに冷静に返したカコウエンに対し、シリューは面白くなさそうに鼻を鳴らすと私の傍から離れる。

しかしこの女（シリュー）は、いつも誰かをおちょくらなければ気が済まないのだろうか？

「しかし、カコウエン殿とシリューは何処で知り合ったんだ？」

「確か、最初に会ったのは、この街に初めて来たときですから一月前くらいですかな？　まあ、その時は名前の交換くらいしかしませんでしたが」

「ああ、それで今日、ようやく見つけてな……こうして機会を得ることができた」

ということは本当に出会って数時間程度しか経っていないということか。

そんな相手にこうも気安く話すことができるシリューには驚かせる。

が、しかし、このカコウエンという女性は頭が切れるようだ。

「今日、ようやくか……私は数日前、あの戦の後あたりから何処からか見張られている気がしたんだがな」

前の戦で豪快名乗りを上げて、敵を討ったのだから、覚えれて警戒されているだろうということくらい理解していた。
普通、自分の街に見知らぬ武人がいたら警戒の一つはするだろう。

「なるほど、やはり見破られていましたか」

「だから言ったではないか？　らんす殿に対しては小細工より堂々と行くべきだと、な」

特に驚くこともなく頷くカコウエンにシリューは自信満々の笑みで頷く。
つまりそれが、昼のお誘いということなのだろう。

「らんす殿には、不快な思いをさせたようで申し訳がないと思っています」

「特に気にしていない。　それでこうして呼ばれるということは貴方かソウソウ殿の眼鏡にかなったということか？」

得物を持たずにこちらの前に立っている。
つまり、最低でもいきなり斬りかかってくるような危険人物とは思われていないようだ。

「さあどうでしょうか？」

こちらに振り返って口元を緩めるカコウエンの後ろには、城壁に囲まれ、門には見張りの兵が立つ城。
陳留を統べる王の住まう居城に私達は辿りついた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・

カコウエンの先導に謁見の間に辿りついた私達を迎えたのは、様々な思惑が混ざりこんだ三名の視線だった。

王座に座るのは、ソウソウ本人で彼女の右手にはあのカコウトンと呼ばれる女性。

そしてもう一人は被り物をした少女だった。

特にこの少女の眼つきは悪く、私の方を睨みつけていた。

それに対し、ソウソウはこちらに興味を持っているようで、表情が笑っていた。

カコウエンが、王座の傍に戻るとこの部屋の主が口を開く。

「貴方がランスロットね。　私はこの陳留の太守をさせてもらっている曹孟徳よ」

「名は知られているようだが、一応名乗らせてもらう。　ランスロットだ」

膝をつくことなく名乗った私に、カコウトンと少女は眉を顰めるが、当のソウソウは特に気にすることなく、ただ口元を釣り上げてより深い笑みを浮かべる。

「陳留に滞在しているようだけど、この街はどうかしら？　気に入ってもらえたかしら？」

「ああ、とてもいい街だと思える。　民は笑い、明日を楽しみに生きていく。　良い統治の結果だろう」

「異国の者にそう言っていただけるなら、それは光栄なことね」

「そう思って問題ない。　私は無駄な世辞は言わないようにしている」

当たり障りのない何でもない会話。
だが、私が口を開くたびにソウソウの直臣達の表情が歪み、それを見ていたシリューは必死に笑いを堪えていた。

「ふぅ、そろそろ本題に入ろうかしらね？」

「そうしていただきたい。　私は早く宿に戻って可愛い弟子共の面倒を見なくてはならないので」

カン達の鍛錬が午前で切り上げて途中だった。
一応、個人意志で鍛練はさせておいたが、私の監督無しでは怪我を

する可能性もある。
それゆえ、私は迅速に帰らねければならない。
これは間違いなく本心であるが、この無礼な物言いは彼女らの反応を見るのに最適だった。
「き・さ・まっ！！　さっきから華琳様への無礼な口を聞きおってからにっ！！　華琳様の命により黙っていたが、その面をぶん殴ってくれるっ！！」
一番大きな反応を起こしたのは、ソウソウの右腕であるカコウトンである。
彼女も謁見の間だからこそ、手には武器は持ってはいないが、その体からにじみ出る覇気と殺気は、一般兵が見れば腰を抜かすほどだろう。
そんな彼女だからこそ、やり易かった。
「なるほど、貴方の噂は聞いている。　なんでも、曹操殿一番の家臣で勇猛な名将と、な」
「ほう……それで？」
私の言葉に、カコウトンは一瞬だけ溢れ出る殺意を止めて、興味深そうにこちらに聞き耳を立てる。
頬も微かに緩んでいるカコウトンの反応に、シリューの気持ちが少しわかった気がした。
「凄まじいほどの猪だ、と」

「■■■■っ！！」

一気に評価を叩き落としてやると、先程以上に怒り狂ったカコウトンが声無き咆哮を上げて、私に向かって襲いかかってきた。

中々な速度だったが、如何せん怒り狂っているだ。

単純な鉄拳を左手で流すように逸らすと、そのまま右手でカコウエンの服の襟を掴み、後方へと投げつけた。

ぐぇ、と蛙が潰れたような声を上げるカコウトンの肩を固めて動けなくすると、周りから小さな歓声と舌打ちが聞こえた。

「おお、お見事ですな、らんす殿」

「へぇ……」

呑気に歓声を上げる傍観者と対し、私に投げられたカコウトンは真剣そのもので、どうにか拘束から逃れようとしているが、完璧に固めているために逃れることができない。

が、いつまでも女性を抑えつけるのは私の吟味に反することである。故に、カコウトンの手を離すと、非礼を詫びるために一つ助言を加える。

「見事な一撃だったが、少し単純すぎるな。　それにその程度の挑発に乗るようでは戦場では生き残れないな」

「ぐぐぐっ、貴様……」

倒されてもなお、向かってこようとするカコウトンに対し、ソウソ

ウがようやく止めに入った。

「春蘭、やめなさい。　貴方は私の泥を塗るつもり？　……私の部下が失礼したわ、ランスロット」

「気にすることない。　子犬に噛まれた程度で喚く私ではない」

自分のことで謝るソウソウの姿を見て、大人しくなったカコウトンだったが、私が再び投げ入れた油により、よりいっそ燃え上がるが、慌てて駆け付けた妹の手により動きを封じられる。

「落ち着け、姉上。　ただの挑発だ」

「これ以上私の部下をからかわないでちょうだい。　その子は純粋なのよ」

「そのようだな。　予想以上の反応だからこちらも辞められなかった」

妹のカコウエンがあそこまで冷静だったのだから、この程度の挑発には乗らないだろうと思っていたが、面白いほどに乗ってきたから、辞めるにやめれなかった。
隣のシリューなんかは声を上げて笑っている。

しかし、ある程度は見させてもらった。
カコウトンはわかりやすい性格をしており、それは被り物を被った少女も同意見だった。
彼女は恐らく文官なのだろうが、私を見る目にはカコウトンと同等の殺意が見えた。
それとは、対照的にカコウエンは終始冷静だった。

時折、眼つきが悪くなってもいたが、三人のうち一番冷静だったのが彼女だろう。

だが、肝心のソウソウは読めなかった。

あの程度の挑発には乗らないようで、逆に向こうが私を見るほどの余裕があった。

「ふふふ、しかし、中々面白い男のようね、ランスロット」

「そう言っていただけることは光栄だ、そう思っていいのだな？」

「ええ、私も無意味な御世辞は言わない主義なのよ」

簡単に笑みを浮かべるソウソウの評判は想像以上だと判断し、これ以上この場で話しても見えないだろうと思い、逸れに逸れていた話を元に戻した。

「そうか、所でそろそろ本題に入らないか？」

「そうね。　なら本題に入るとするわ。　貴方にはこの後大切な用があるんだし」

「ああ、頼む」

ソウソウは今まで浮かべていた強気な笑みから、真剣な表情に戻し、本題をきり出した。

「ランスロット、それに趙子龍。　貴方達は私の進む道に共に来なさい」

これは決定事項だ。　そうとも聞こえる発言で、強引ともいえる誘いだが、それがかえって清々しかった。
これが、ソウソウなのだろう。
そう言われて嬉しいのは隣のシリューも同様で、嬉しそうな笑みを浮かべる。

「あの曹操殿にここまでかっていただくとは、武人として嬉しいことですな」

シリューの言うとおり、彼女に言われて嬉しくない者などいないだろう。
だが、私の答えはソウソウと出会った時に決まっていた。

「だが、断らせていただく」

「……理由を聞いてもいいかしら？」

私の即決とも言える返答に、ソウソウの表情がようやく崩れてきた。
断れるとは思っていなかったのだろう、不服そうな彼女に私は、最大限の礼儀として言える範囲での心境を語ることにした。

「先に言っておくが、ソウソウ殿がどうということではない。　むしろソウソウ殿の才覚、意志。　これは間違いなく本物だ。　貴方のような人間はそう御目にかかれないだろう」

これは初めてみたときに思ったことで、こうして話してもそう思えた。
いや、より一層彼女の凄みを感じることができた。
間違い無く彼女は名君になれる素質がある。

そんな彼女を見て私は気付いてしまったのだ。

「だが、私はある王に忠誠を誓った身だ。　誰かの元に膝を突くことができない」

私が敬愛し、共に駆け抜けた最高の王『アーサー王』以外に私は膝をつくことができない。

たとえ刃を向き、結果反逆を起こしてしまった私でも、あの方以外の王は考えられなかった。

「その人物は私を越えるということかしら？」

「ああ、あの御方を越えることは誰もできない。　そう思える最高の王だ」

私の意志の強さを悟ったのか、それとも尊重してくれたのかはわからないが、一度だけ小さく頷くと、シリューに視線を向ける。

「そう……なら趙子龍。　貴方はどうかしら？　貴方も私に槍を捧げるのは相応しくないと思うのかしら？」

「いえ、曹操殿はまさしく稀代の英雄。　数日前にそう言っていただければ、私は貴方に忠義を捧げたでしょうね」

名君からの誘いを断ったシリューは、告げた言葉と共に私に視線を送る。

その意味が解らないほど私は愚かではない。

「そう……残念だけど仕方ないわね。　嫌がるものを置いておく趣味は無いわ」

名残惜しそうに弱弱しい笑みを浮かべるソウソウだが、彼女は私達の意志を尊重してくれた。
そんな彼女に敬意を表すために私は一度頭を下げると、シリューとともに謁見の間を出口へと向かう。
扉に触れて、退室しようとした私は、私の目的を果たすことにした。
「そう言えばソウソウ殿に一つ言い忘れていたことがある」
「……何かしら？」
「私は貴方の下につくことはできないが、貴方の意志、想いは陳留に住まうものとして大いに賛成だ。どのような些細なことでも頼まれれば手を貸そう」
将ではなく兵としてなら戦おう。
それだけを伝えると私は謁見の間から出たのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・

「しかし、本当に良かったのですかな？」

「ああ」

シリューとともに宿への帰り道を歩いていく。
私の心中に後悔はなかった。

確かにソウソウ……いやソウソウ殿というべきだろう。
彼女からの誘いはとても魅力的で、忠義の心が動きそうになったのは認める。
だが、私は多分これからは誰にも仕えることはできないだろう。
王やソウソウ殿のように、立ちあがり覇を唱える強さもないだろう。

それでも苦しむ者のために何かしたい。

「シリュー……貴方こそ後悔はないのか？」

シリューの言ったこと、それは私に仕えた言うことだ。
それはソウソウ殿より、私を取ったことになる。
それが私に惜しくてならない。

「後悔なんてありませんよ。　貴方は間違いなく我が槍を捧げるに

相応しい人だ」

「シリュー……」

「星、そう呼んでいただきたい」

清々しいほどにそう言った彼女は自らの真名を名乗った。

そんな彼女に返す言葉は一つしかなかった。

ありがとう、と。

幕間　その一

「ふぅ……働いた後の一杯は何とも言えない旨さですな」

器に入った酒を一気に飲み干し、メンマを齧る星が本当に幸せそうに微笑んでいる横で、私は遅くなった晩飯を口にする。

今日は城での兵の鍛錬を手伝ってきたのである。

曹操殿からの誘いを断ったとはいえ、協力を惜しまないと言った手前断ることはできない。

そういうわけで、曹操殿の兵を扱いてきたのだが、彼等は本当に優秀だった。

一人一人の質もそうだが、陣を組んだ時の集団戦闘は、賊共とは天と地ほどある素晴らしいものだった。

何より、余所者を私の鍛錬に不服を言うわけでもなく、真剣に取り込む素直さには感動した。

そう、兵達は素直でよかったのだ。

「しかし、夏侯惇殿には困ったものですな」

ニヤニヤとこちらの方を見て笑みを浮かべる星のいうとおり、私が気疲れしたのには将に問題がある。

正確には一人は将ではないのだが、この二人が面倒だった。

一人が先日の顔合わせの際に殴りかかってきた夏侯惇である。

確かに先日は私も悪かったと思うが、あそこまで喧嘩腰で来るとは思わなかった。

私が兵達を稽古している横でも、しかめっ面でこちらを睨んできて、やりずらいことこの上なかった。
そのうえ一騎討ちを仕掛けてきて、私があっさりと勝てば、もう一度とせがまれて、もう一度勝つと、かなり落ち込んだ様子でそのまま泣きそうな顔で走り去ってしまった姿を見ると罪悪感に苛まれる。

その光景を見ていた夏侯淵の話では、明日には元に戻ると言っていたが、流石に心配してしまう。
それを聞いた曹操殿が慰めておくと言っていたが、その時の表情が何とも言えない笑みだったため、違う意味でも心配してしまう。

「私は荀？という少女の方が困ったが、な……」

その夏侯惇より面倒だったのが、荀？という被り物した少女である。
彼女は曹操軍の軍師だったようで、曹操殿に紹介された後、二人きりになった際に飛びだす罵声の雨は、流石に堪えた。

最初は幼い子の言うことだと聞き流していたが、流石は軍師言うべきか、聡明な彼女の言葉の槍は、私の心を容易く貫いた。
後々聞くと、彼女は凄まじいほど男嫌いで、私の勧誘に一番反対していたらしい。

「ほう、らんす殿なら、幼い子の戯言と聞き流すと思っていたのですが」

「彼女を見ていると知り合いを思い出して、な……」

思いだすのは、円卓の騎士一の毒舌家であるケイのことである。
私の戦い方や、配下の兵の食費、宴の作法、と様々なことに小言言われて、本当に頭が上がらなかった。

多分、他の円卓の騎士の仲間達もケイが一番苦手だっただろう。
唯一の救いは、男のケイと違い、荀?が可憐な少女だということだろう。

そんな二人とは違い、残る重臣の一人である夏侯淵は友好的に接してくれた。
冷静で理性的な彼女を見ていると、本当に彼女が妹なのか?と思ってしまうが、彼女の姉を見る姿を見ると妙に納得してしまう。
武技の方も素晴らしいもので、彼女の弓技を見せてもらったが、トリスタンを思い出すような、一流の弓兵である。

「ふむ……らんす殿、女の隣で他の女の事を考えるのはどうかと思いますが?」

「私の記憶では君の方から話を振ってきたと思うが?」

「確かに夏侯淵殿は綺麗な方ですからな」

「君も魅力的だが?」

「なら、態度で示してもらいたいものですな?」

「亭主、大急ぎで酒を頼む」

酒を呑み干したのか、構ってくれと腕を握ってくる星の扱いに面倒になり、亭主を呼ぶと新しい酒を用意させる。
注がれる酒を嬉しそうに見る星を、横目で捕えながら、ふと思い出

す。

そう言えば彼女に真名を呼ぶことを許されたのだと。
この国には真名という大切な名前があることは教えられていた。
勿論、シリューと呼んでいた頃は彼女の真名は知らなかったが、先日彼女が私のことを主として槍を捧げると言って真名を教えてくれた。

ここに来た頃の私なら、私には相応しくないとか、君の真名を呼ぶ資格など無いと言っていたかもしれない。
確かにその気持ちは今でもある。
王を裏切り、同僚を斬り、国を割り、滅亡させた私がこのような平和な安らかな日々を過ごしてよいのか
、と。
しかし、その反面、真名を教えてくれたという信頼を得たことを嬉しく思う気持ちもあるのだ。

それにこの星とカン達の暮らしを楽しんでいるのも否定はできない。
だからこそ、何れ別れるその時まで続けばいいと思っている。

「らんす殿、一杯頂きませんか？」

「仕方がない。　一杯だけだぞ？」

顔を真っ赤に染めた星が持つ器を受け取り、呑み干す。
久しぶりの酒は格別な味がした。

第七話　volunteer　army

陳留に立って一月程経った頃のことである。

この国での生活も慣れ、言葉や字も曹操殿達の協力があって無事覚えることができた。

故に最近は夜中に書物を読み漁るのが日課になっている。

昼間は、城を訪れて、兵の鍛錬に、星や夏侯惇と刃を交えたり、カン達を扱いたりとそれなりに忙しく、気ままな毎日を送っている。

そんなある休日。　いつものように星達と昼食を取っていると、夏侯淵が馬を走らせて現れた。

「お、どうしました夏侯淵殿？　何やら急ぎのようですが」

「ああ、少しお前達に頼みたいことがある」

その真剣な顔付きに、星に視線を送ると、彼女は立ち上がり、自室で休んでいるカン達を呼んできてもらう。

その間に私は夏侯淵の状況を確認する。

「どういう手順になっているんだ」

「驚いたな……知っていたのか？」

夏侯淵は何やら驚いたようだが、私はこの都市で情報収集も行っているのだ。

その際、先日聞いた商人の話と夏侯淵の表情から大体の話は読める。

黄巾賊が現れたのだと。

「情報は戦場において生命を左右するもの思っているからな」
「確かにそうだな。　今回もその情報のおかげで、賊の接近に気付くことができた」
そう言って笑う夏侯淵は、珍しく好戦的な笑みを浮かべている。
この表情を見ると、やはり夏侯惇の妹かと納得できるものがある。
「珍しく気が滾っているようだが、どうかしたのか？」
「いや、少し頼みごともされたものでね」
「なるほど……では詳細を教えてくれ」
「ああ、場所はここから南東に五十里程離れた所にある村だ。　そこには百人ほどの村人が取り残されており、その周りを五千程の賊兵が包囲しているようだ。　今は義勇軍がどうにか持たしてくれているようだ」
五千。
この前の戦の数の半分のようだ。
籠城しているようだが、城とは違い所詮は村である。五千もいればそう長く持たないだろう。
つまりは一刻も争うということだ。
「そうのんびりできる状況ではないな、星っ！！」
「らんす殿、用意はできておりますよ」

愛槍である龍牙を担ぎ、夏侯淵に負けないほどの好戦的な笑みを浮かべる星がいた。

「カン、ソン、キョウ、久しぶりの戦場だ。　鍛錬の成果見せてもらうぞっ！！」

「わかりやしたっ！！　兄貴の訓練に優る恐怖は無いということを賊共に教えてやりますぜっ！！」

「しゃあっ！！　死んでたまるかよっ！！」

「ふ、ふ、ふ、ふ、……も、も、燃えてきたんだなっ！！」

戟を、剣を、斧を担いだカン達が中々精悍な顔つきで現れた。

「夏侯淵、詳しい状況は馬の上で聞こう」

「助かる。　部隊の準備はできている」

夏侯淵の後に続き、宿の外に出ると用意された六頭の馬に我々は跨る。

「これより防衛戦に向かう。　行くぞっ！！」

部隊の隊長を務めるだろう夏侯淵の声を皮切りに私達は馬を走らせた。

・・・

「ああ、この役目は私がうってつけだ」

軍の先頭に立ち、切り裂く力がこの中であるのは間違いなく私だろう。

弓を得意とする夏侯淵は、中軍からの全体指揮が好ましいし、動きの身軽い星は、遊軍として援護と支援するのが適切だろう。

余所者だが、この軍を鍛えたことある私ならどうにかやれるだろう。

すると馬を走らせて二時間弱、どうやら目的地に着いたようだ。

砂城のような脆い守りの村に、群がる蟻のように囲む賊の姿を前方に捉えると、

「らんす殿の見せ場、楽しみにしております」

「武運を祈る」

そう言って後方に下がる星と中軍に戻る夏侯淵を見送ると、私は腰に差さったアロンダイトを抜く。

「全軍に告ぐっ！！　我らはこれより我らの宝である無垢なる民を救出に向かうっ！！　目の前にいる外道共を容赦なく切り捨てろっ！！」

私の号令に、ようやく気付いたのか賊共は大慌てでこちらに振り返る。

だが、もう遅い。

「全軍、突撃っ！！！」

木の棒を突き刺した防壁を飛び越えると、近づく賊共の首を飛ばしていく。
悲鳴と怒声を上げる賊共を殲滅するのが我々の仕事ではない。
我々の目的は突破である。

周囲を見渡しながら、賊の陣形を確認し、脆い部分を切り裂くように突っ切っていく。
私が走る後を、カン達が突き抜け、曹操軍の精鋭が命を刈り取る。

「ぐっ、我こそは……」

「邪魔だ」

賊将らしき大男もいたが、すれ違いざまに斬り捨て、構うことなく村の方へと向かう。
その間に、夏侯淵が文付きの矢を飛ばし、村の門を開けるように指示すると、程なくして村の門が開き、私達はそこに群がる賊共を駆逐し、悠々と村の中へと入っていった。

部隊を四方の門へと散ばせると、夏侯淵と星を連れて村の中央へと向かう。

「お見事でした、らんす殿。　雷神のような鋭い用兵術は素晴らしいものです」

「いや、それ以上に夏侯淵の弓には助けられた。　遠くで五月蠅い弓兵共を黙らしてもらったのには助かった」

「それを言うなら趙雲の働きには感謝している。　彼女がいなけれ

ば、死傷者も出たかもしれん」

互いに謙遜しながら馬を下りると、そこに三人の少女達が現れた。
彼女達は、私達の姿を確認すると膝をつき拝礼する。

「官軍……正規軍の方でしょうか？　この義勇軍を指揮させていただいています。　楽進と申します」

「李典です」

「于禁です、なの」

三人の女性から見える身のこなしから、武の匂いを感じ、見た目以上に勇猛だと評価する。
それに勇猛だけはなく、籠城戦もこなせるのだから、鍛えれば一角の将になれるだろう。

「曹操軍、陳留軍の部隊長を務める夏侯淵という。　まずは君たちに感謝をしたい。　ありがとう」

頭を下げる夏侯淵にしたがって私達も感謝の意を示す。
彼女達がいなければ、この村はとうの昔に食い散らかされていたかもしれない。
なら、彼女達義勇軍は百人の民の英雄ということだ。

私達の反応に、彼女らは少し慌てながらも頭を下げる。

「い、いえ、こちらこそ、将軍様の部隊が来なければ一刻ほどで落ちたかもしれません」

「そ、そうやな。　それにうちらやって好きでやってることやし」
「そうなの、寧ろ賊共をぶっ飛ばしてやりたいの」
一人は緊張のあまりか、めちゃくちゃなことを言っているようだが、特に誰も触れないことにした。
「そうか、ありがとう。　ではもう少しだけこの戦場に付き合ってくれ」
「「「はいっ！！」」」
彼女達の気持ちのいい返事を聞いていると、門の警戒に向かわせていたソンがこちらに走ってくる。
「旦那っ！！　門が破られますっ！！」
その一言により、弛緩していた空気が一気に引き絞まる。
門が破壊され、賊軍に雪崩れ込まれれば、村を落とされることは確実である。
「夏侯淵、中央の指揮は貴方に任せる。　星、君は私と共に来い。
門を修復する」
「ああ、任せた、ランスロット」
「はいっ」
夏侯淵に全体の指示を任せると、星とソンとともに東門へと向かう。
移動の際、擦れ違った兵や村人達に余った板を持ってくるように指

示すると、転がっている弓と矢を取る。
弦の張りを確認すると、東門の上に昇ってきている賊兵に向かって弓を引く。
放たれた矢は一直線に賊兵に向かい、見事額を貫き、絶命させる。
「ほう……らんす殿は多才ですな」
「状況によれば弓も引くこともある」
星の称賛を聞きながら久しぶりに引いた弓の感覚を確かめるために、次々に矢を放つ。
放った矢は殆どが、昇ってくる賊共に辺り、賊共は門の外へと落ちていく。
「全員、矢を構えろ。　一度追い出してから、防壁を作り直す。
ソン、近くの騎馬兵を呼んで来い。　五十もあれば足りる」
周囲にいた兵に弓を構えさせ、門の外へと矢の雨を降らせると、その間にソンに近くにいた騎馬を集めさせる。
後ろに振りかえると、指示を待っていた星と目が合う。
「何を企みましたか？」
「星、私の馬と君の馬を持ってきてほしい。　そのあと大仕事を頼みたい」
それだけ星に伝えると、東門がゆっくりと開き始めて、そこから賊共が顔を出す。

「了解しました」

「早急に頼む。　よし、槍を構えろ。　溢れ出てきた賊共を確実に狩れ」

走り去っていく星の後ろ姿を見届けた後、私はアロンダイトを構えて、一歩踏み込む。

勢いに任せて現れた賊共は私の目の前に現れて、襲いかかってくる。

が、私の剣の範囲に入ったものは全て首を刎ね飛ばし、刈り取っていく。

横から迫る槍を持った賊も、突いてきた際に左手で、槍先の柄を掴み、首を刎ねる。

背後から回ってきた賊には、振り返りざまに槍を振るい薙ぎ倒していく。

「さあ、来い。　この首はそう簡単にやらんがなっ！！」

我、死線に在り。

戦闘による高揚感を感じながら、周囲にいる賊共を食い散らす。

右手にアロンダイト、左手に槍を持った私は賊の集団へと突撃した。

第八話　hard　fight

「くそっ、死、ぐぎゃ……」

近づく賊を斬り殺す。

「囲めっ囲めっ！！」

「こ、こいつ……ぎゃあっ！！」

周囲から迫る槍の檻を地面に転がるようにして掻い潜り、囲む賊達の足を斬り飛ばす。

「調子にのるんじゃねぇっ……っ……」

立ちはだかる者を両断する。

斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る……

鮮血を顔に浴びても、賊を切り裂く。

頬に刃がかすめても、ひたすら剣を振るい続ける。

斬って斬って殺して殺して……唯一人で死体の山を築く。

「らんす殿っ！！」

私を呼ぶ星の声に、後方へと跳ぶ。

その直後、無数の矢が上空を支配し、地を這う賊へと突き刺さった。

「騎馬隊っ！！　この好機を逃すなっ！！」

星の率いる五十程の騎馬隊が、群がる賊を切り崩した。
その光景を見て、私もソンが連れてきた馬に飛び乗ると、賊軍へと向かって馬を走らせる。

「徹底的に叩けっ！！　賊共の士気を挫くっ！！」

「おおっ！！」

私に続く歩兵を連れて、星が斬り開いた道に続き、賊の首を飛ばしていく。

「おお、よし皆っ、らんす殿一人に手柄を許すなっ！！」

「しゃあっ！！」

「一月前の俺達とは違うことを見せてやるっ！！」

「ぶっ潰してやるんだなっ！！」

カン、ソン、キョウも義勇軍とともに、門から飛び出して賊に斬りかかっていく。
完全にこちらに流れが来ている。
そう感じてさらに追撃を駆けようとしたその時、

「退けっ、退けっ！！！」

賊軍の本陣から銅鑼の鳴り響く音が聞こえた。
ぬぅ、どうやら潮時のようだ。

「全軍、停止しろっ！！」

私の号令に、星が率いる騎馬隊は、後方転換し、村の中へと戻り、その後をカン達義勇軍が追う。
義勇軍が村の中へと戻るのを確認すると、私と歩兵部隊は、殿を務めながら門の中へと戻る。

全軍の収容を確認すると、門付近に待ち構えていた工作部隊が、門の修復に入る。
それを私が眺めていると、馬に乗ったままの星が横へと並び立つ。

「もう少し仕掛けたかったところですな」

「が、あれ以上の追撃は危険だ。　勢いはこちらにあったとは言え、兵力差は十倍ほどある」

「む、確かに」

星の騎兵五十、私の歩兵五十、義勇軍百程。
合わせて二百程の軍勢で、総数五千以上の賊軍に追撃を仕掛けるのは危険すぎる。
それに二百程の賊兵を葬ったのだから、初戦の戦果では十分だろう。

「それにはっきりしたことがある」

「ええ……向こうもただの馬鹿ではないようですね」

賊軍の陣を切り裂いた際の陣形、先程の退却の頃合い。
間違いなく前回の時のような烏合の衆ではない。

「面倒だな……」

間違いなく、将がいる。
それも戦いを知らない馬鹿ではない将が。

「が、遣り甲斐がありますよ」

その事実に、星は好戦的な笑みを浮かべて答える。
そんな彼女に危うさと頼もしさを感じていると、工作部隊を率いていた女性、確か、李典だっただろうか？
彼女が何やら興奮したようにこちらに向かってくる。

「何なんや兄さん達はっ！！　めちゃくちゃ強いやないですかっ！！」

「所詮、賊相手だ。　そう遅れを取らんだろう」

「はっはっはっ、天下無双のらんす殿と常山の昇り竜と呼ばれた私に掛かれば、この程度の相手、大したことではない」

李典の興奮を煽るように星は満足げに笑い始める。

天下無双なんぞ名乗った覚えはないとか、星が常山の昇り竜なんて言われるのを聞いたことはないとか、
二つばかし疑問に感じたが、さらに興奮した李典によって口を挟むことができない。

「すごっ……天下無双ってお兄さんっ、あの呂布と互角っていうことなんか！？」

片や興奮気味に尊敬の眼差しと、

「ふむ……私が完全に無視されている気がするが、まあいいだろう……まあ、この方なら三万斬りできるだろうな」

笑いを堪えてからかう星。

そんな二人を見てどうするべきか考えていると、向こうから助けの船がやって来た。

「ランスロット、趙雲。　ごくろうだったな」

義勇軍の将の二人、楽進と于禁を引き連れた夏侯淵が、労いの言葉を口にする。

そんな彼女に答えるように手を上げると、目の前で騒ぐ二人の収拾を手伝ってもらうために、助けを求めた。

・・・

初日の交戦を終えた夜。
李典と于禁が率いる工作部隊に門の補強を任せて、星やカン達に村の外と周囲の見張りを頼み、夜襲への備えを万全な形にする。
その間、私と夏侯淵は今後の方針を考えるために、この村で一番広い建物である宿のロビーで、残る義勇軍の将が楽進を交えての話し合いをしていた。

「なるほどな、やはり賊軍には敵将がいたか……」

「ああ、数の多いだけの烏合の衆なら討伐も楽だが、頭がいるとなると少々面倒だ」

前回の戦は、相手が頭のいない烏合の衆だったために、半数の兵力で討ち勝てた。
無論、曹操殿が指揮したことや、猛将の夏侯惇の強襲部隊と、様々な要因があったのは確かだが、まず一番の勝因は賊軍に将がいなかったことだろう。
もし、前回も今回と同様の将がいたのなら、向こうは挑発に乗らずに籠城していただろう。
そうなった場合、陳留軍はもっと多くの犠牲を払うことになったはずだ。

「それに、向こうも一度奇襲を受けたのだから、奇襲や夜襲には警

戒するだろうな……」

「そうなると、第二陣との挟み撃ちを読まれる可能性があるな」

当初の計画は完全に潰れたようだ。

「ええ…っと、その第二陣と合流して殲滅すればいい話なのでは？」

私と夏侯淵の会話に恐る恐ると言った様子で楽進が割って入ってきた。

生真面目そうな彼女に好感を持ちつつ、私が思いつく最悪の案を口にする。

「ああ、確かに向こうが五千のままだったら問題ないだろう」

「五千だったら？　っまさかっ！？」

「援軍を呼んでいる可能性がある。　真っ当な将なら一番に思いつく最適で簡単な案だ」

数で負けたら、数を増やして圧倒する。

数こそが、戦場を左右すると言ってもいい。

黄巾賊の厄介な所は、官軍を遥かに超える兵力なのである。

「東門での戦いで向こうは思っただろうな……向こうには手練いるとな」

「そして、できるだけの消耗を避け、援軍が来た後、数で押し潰すと言うわけか」

ようやく自体が呑み込めたのだろう。
顔を青くさせた楽進には悪いが、慰めたり落ち着かせる暇は無い。
一刻も争う以上、早急に良案を立てなければならない。

「夏侯淵、援軍の数はどれぐらいか予想できるか？」

「一万……程だろうな。　これ以上兵数を割くと、陳留の守りが危ない」

現在の陳留の兵力や財政から見て、それが妥当というところだろう。
賊を討伐に兵を送って、その間に攻めてきた賊に本拠地を落とされるという事態になれば目も当てられない。

「向こうの援軍次第ということか……こちらの希望としては五千から一万がいいのだが」

「それは絶望的だな。　確かに曹操様の収めるこの陳留一帯は、賊も少なく、治安が良いが、南に東と余所から流れてくる可能性がある」

夏侯淵の言う通りだろう。
前回と今回の賊も、余所から流れてきた黄巾賊だったという報告は聞いている。
いくら曹操殿が優秀と言っても、余所の領地まで口を出すことはできない。

「東は陶謙、南は袁術だったな……あまり良い噂は聞かないが……」

「ああ、陶謙は現在の漢の太守の典型だな。　賄賂に豪遊、そのし

わ寄せに民は餓えに苦しみ、その結果が黄巾賊だ。　袁術はそれ以上に民から税を絞り取り、黄巾賊の反乱が起きているようだな」

「五万という大軍勢を率いてくるかもしれないということか……」

ここから少し北に位置する幽州では、十万の賊軍が集まっているのだから、有り得ない話ではないだろう。

しかし、そうなれば戦にもならない。
野戦などでは策の練りようにもよるが、今回は籠城戦。
しかも、城ではなく、村である。
囲まれでもすれば半日は持たないだろう。

「いざとなればここを破棄することも考えておくべきだろう」

「そんなっ！！　この村を見捨てるということですかっ！！」

ずっと守ってきたからだろうか？
いや、彼女自身がこの村の人間達との境遇が近いからだろう。
悲しみの声を上げる楽進には悪いが、夏侯淵の言っている案はそう間違ってはいない。

賊軍が亀のように陣地に引っ込んでいる間に村人を逃がし、もっと守りやすい場所に陣を構えて、敵の襲来に備える方が危険度が低い。

「死んだらそこで終わりだ。　なら苦しんでも生きるべきだ」

「それは、……」

「二人ともそこまでだ。　仲間割れをしている場合か？」

言いあう二人に、私は仲裁に掛かる。
こんな状況での仲間割れは、最悪な状況を招きかねない。

「しかし……」

「楽進、君の気持ちはわかっているつもりだ。　こちらとしても村を見捨てるなんて行為はしたくない。　それに夏侯淵、この程度の苦難で躓いているようじゃ、曹操殿の大望も理想論者の夢物語で終わることになるぞ？」

「それはわかっている。　だが、このままでは村共々こちらもやられるぞ」

夏侯淵もわかっているはずだ。
曹操殿が抱く大望は、天下統一以上に難しいことなのだということを。
そんな大望を抱く主の配下として、この程度の危機は笑って越えなければならないことを。

「昔、とある方が言っておられた。　危機を恐れるのが人、そして死地で笑うことができるのが英雄だと」

そう言って、ありえない劣勢を覆した王がいた。
故に偉大なる王は、英雄になれたのだと思う。
その名声は、海を越えた異国にすら届くほどの。

「笑う？」

「勿論、諦めて笑うことではない。　笑い飛ばして危機を乗り越えろという意味だ」

昔、王に聞いたことはある。
『王には怖いことは無いのか』と。
王は答えた。
『何もしないことが一番怖い』と。

「策がある。　いや策と言えば、軍師殿に笑われる程の稚拙なものだがな」

だから私は乗り越えようと思う。

腐っても、アーサー王の元に集まった誉れ高き円卓の騎士の一人として。

第九話　ｂａｉｔ

夏侯淵ｓｉｄｅ

一夜明けて。
私は、この村の中央に急遽作られた櫓の上に昇り、まだ薄暗い中、昇っていく朝日を眺めていた。
村の中は、本日の戦のための準備に、正規軍も義勇軍も慌ただしく動き回っていた。

視線を村の中から外へと向けると、この村の東門から三里ほど先に、賊軍の陣営が築いているのが見える。
陣の規模から、夜営の跡から、ざっと一万程いることは目視で判断することができた。
やはり、援軍を呼んだようだ。

時間が過ぎれば過ぎる程、こちらが不利になるのは明白だろう。

好機はここしかない。

そう意気込み、櫓から降りようとすると後ろから誰かが昇ってくる音がした。

「夏侯淵、賊の様子はどうだ？」

「ああ、やはり援軍を呼ばれたようだな。　ざっと一万と言ったところだが、自分の眼で確認してみるか？」

櫓に昇って来たのは今回、策の提案者であるランスロットだった。

白銀の鎧に、見るものを魅了する宝剣を腰に差し、余裕と覇気に満ち溢れた精悍な顔つきで、首を横に振る。

「いや、弓兵の貴方が見たんだ。　それに狂いはないだろう」

顔を緩める表情一つすら様になるランスロットを見て、これが魅力（かりすま）というものか、と思わず感心してしまう。

「ふ、そうか。　しかし、貴公は思った以上に豪胆な方だな」

「別に気を遣わなくてもいい。　私自身、無茶な力技だと思っている」

苦笑いを浮かべるランスロットだが、その力技がこの作戦で一番の良案にも思えたのは確かだ。

私も含め、義勇軍を率いた三人も賛同したのだから。

それに私達はこの案に反対なんてできるわけがない。

「しかし、本当にいいのか。　前線の指揮を任せても」

賊軍と正面から当たることになる前線部隊の指揮をランスロットが受け持ったのだから。

彼曰く、作戦考案者の責任だとか、私が一番白兵戦に優れていると言っていたが、本当の所は一番危険なところを他人に押しつけたくないのだろう。

「ああ、それよりここでの敵の足止めと合図の方は任せる。　これには冷静な判断能力と卓越された指揮能力が必要だ。　これは貴方以外では不可能だ」

ランスロットの言うとおり、作戦の変更はできない。
この作戦には正規軍、義勇軍、村人の命が掛かっている。
だからこそ、最高の配置で臨まなければならない。

作戦決行の鐘がなる。
その音色に、ランスロットはこちらに向けて、右手で左胸を小さく叩く。

ランスロットの国では、この動作を誓いの儀式に使うらしい。
それを見よう見真似で、左胸を叩く。

「ランスロット……この戦、勝つぞ」

「当然だ」

頷き返したランスロットは櫓を下りていく。

そう、戦が始まるのだ。

side out

・・・

「先に言っておくことがある。　この三百騎全員が生き残れる可能性はまずない」

先頭を行く私は、後ろに並ぶ騎兵達に聞こえる程度の声で語りかける。

「多くの犠牲を生むだろう……全滅だってあり得るかも知れない……無様な死に様を晒すことにもなるだろう」

私の語りには誰も反応することなく、騎兵達はただ私の後を追う。

「命を捨てて戦った君達のことを後に人々は英雄と呼ぶかもしれないが、死に逝く者に等しく与えられるのは無だけだ」

村から離れて一里ほど、賊達は私達の接近に気付いたのだろう。慌ただしく騒ぎだす陣内を、私は肉眼で捕える。

「だからこそ、私が君達に言えることは一つ……死ぬな、だ」

左手を掲げる。

部隊に掲げられた旗には『曹』の一文字。

陣を飛び出し、群がるように迫る賊達を見据えて、私は最後の檄を飛ばす。

「敵を斬り、返り血を浴び、躯を踏みつぶしても、前へっ！！　肉を斬られ、骨を砕かれ、倒れ伏せても、死ぬなっ！！　生きて栄光を掴みとれっ！！！」

アロンダイトを掲げて、足で馬の腹を蹴る。

「全軍っ、突撃っ！！！！！」

≪ウオォォォォォォッ！！！！！！≫

天まで届く咆哮を背に私は、勇敢なる英雄達とともに賊軍の海へと飛び込んだ。

・・・

将がいるからこそ、がこの策の肝である。

『先に言っておくが、たった一人で万という大軍を指揮するのは不可能だ』

私の言葉に、軍に所属する夏侯淵はわかったのだろう、なるほどと感心するような笑みを向けてくるが、もう一人の将である楽進には難しかったのだろう。

首を傾げる彼女に私は、できるだけわかりやすく説明しようと頭で考えながら口を開く。

『一万という軍を、一人で端から端まで指示を送るのにどれくらいの時間が掛かると思う？　もし出来たとしても陣を操ることができると思うか？』

結果はできないだろう。
指示を送ることができても、一万人に言っているのだ。
解釈を間違っていたり、理解できていない者がいるに違いない。
そんな中で複雑な陣でも組めば、勝手に自滅することになるだろう。

『で、でも、噂に聞く曹操様なら簡単にできるかと……それに夏侯淵殿も、千の騎兵を率いていたじゃありませんか？』

『いや、あの時は前軍にはランスロットが、後軍には趙雲が控えていた。　それに私が指示を送ったのはランスロット達二人と、その二人の下につく部隊を統括する部隊長達だ』

『夏侯淵の言う通り、軍の質とは、簡単に言えばこの部隊長達のこ

とを指す。　彼らが上から送られる指示を理解し、末端の兵に伝えることで軍は戦うことができるのだ』

それが戦術というものである。
戦争には、王の政略と将の戦略、そして部隊の戦術が合わさって勝利を得ることができると思っている。
が、これだけではないの確かだし、逆のことも言える場合もある。
だが、現状には必要ないことだから口にすることなく、楽進に策の続きを話していく。

『将がいる。　陣を敷くことができる。　撤退もできる。　それらはつまり、あの賊軍には部隊長のような奴らがしっかりといるということを証明している』

二度の突撃で、向こうの軍にそれらしき者がいるのは確認できた。

それは当たり前なことなのだ。
将が指揮し、兵達はそれを学習する。
それが末端の兵を指揮する部隊長へと成長するのだ。

今回の賊軍は、そうやって敗北や勝利を重ねてできた精鋭軍。
そう考えると、何故彼らが曹操殿の領地に来たのか、も理解できる。
天下に響くまではいかないが、噂が立つ程の曹操殿の領地は普通の黄巾賊は近づかない。
殲滅されるのを恐れるからだ。
だが、今回の賊軍は違った。
彼等は恐らくそうやって勝ち残ったことに、驕りと傲慢を得たのだろう。
そう考えるとこれから行う策に乗ってくる確率は高くなる。

『つまり、私が率いる先遣隊が行うことは一つ……』

・・・・・

「はぁあああっ！！」

賊軍の部隊長の排除である。
騎馬で敵軍内に斬り込み、部隊長を潰すという危険が伴う突撃である。
幸運なことに部隊長の見分けは簡単についた。

「囲んで潰せっ！！　こちらの方が、数はふべっ！！」

戦場で馬鹿みたいに大きな声で指示を上げているのだ。
目を瞑っても場所の特定ができるほど、探すのは容易だ。
おまけに身なりも他の賊共とは違い、鎧を纏っている者もいる。
もしかするとこいつらは軍に所属していたものかもしれない。

「まあ、それを考えるのはこの死地を乗り越えてからだな」

部隊長の見分けが簡単と言えど、ここが危険極まりない死地であることには変わりは無い。
周囲にいるのは賊だけで、各自完全に孤立状態に陥っていた。
こちらの騎兵が賊兵に馬から引きずり降ろされ、止めを刺される光景を何度も目にした。

三百の騎兵隊からも多くの犠牲者が出ているに違いがない。
だが、それでも私達は止まることは許されない。
賊の部隊長の数を減らせば減らす程、他の部隊への負荷が軽くなる。
アロンダイトで部隊長の首を刎ねると、そのまま戟を奪い取ると、そのまま力任せに周囲の賊兵を薙ぎ倒す。
吹き飛ぶ賊達に睨みを聞かせて、剣と劇を振るいながら、周囲で戦う騎兵達に指示を飛ばす。
「誉れ高き曹操軍の兵達よっ！！　一人で敵に当たろうとするなっ！！　周りと連携して敵を討てっ！！」
「「おうっ！！」」
孤立した騎兵を拾い集めながら、賊の攻撃を流しながら、敵部隊長を確実に仕留めていく。
すると、ようやく効果が出始めたのか、賊軍の動きが段々と遅くなり、攻撃を仕掛けてくる頻度が減って来た。
ようやく指揮が乱れたか……
第一陣の役目を終えたことに確信していると、合図の矢が空を駆けた。
「ここは退くぞっ！！　私が殿を務める間に　各自脱出隊形を取れっ！！」
私が賊軍の攻撃をかわしている間に、生き残った騎兵百五十、各自バラバラになりながら敗走を開始する。

そんな彼らの後を追うように、私は賊の追撃から逃れようと馬を後方へと走らせる。

「追ってきたか……戦線は伸び、うまくバラけたな……」

指揮を失い、ゆっくりと追ってくる賊共が村へと向かうのを見て、私は第一段階が成功したことを確信した。

後は夏侯淵に楽進、趙雲に任せるとしよう。

仲間を信じ、もしもの時に備えて私は周囲に散った騎兵達を集め始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0966ba/

円卓無双

2012年1月12日01時57分発行